身近な重要他者の存在と
がん発見と生存時間との関連

奈良県立医科大学健康政策医学講座
博士課程吉本和樹

➢研究背景

近年、がんに罹患した婚姻者は非婚姻者よりも死亡のリスクが低くなるという研究報告が多くみられ、その理由としてソーシャルサポートによる支援が受けやすいことやより良い治療を受けやすいことなどが報告されている。しかし、身近な存在である子どもや親戚、親友とがんの発見割合や死亡率との関連について明らかにしている研究は現時点では見当たらない。

➢目的

本研究では、ソーシャルサポートである身近な近親者や友人といった重要他者の存在が、がんの発見割合やがん発見後の生存時間に影響を与えるのかについて考えることを目的とした

➢ 方法1

使用データ：Health and Retirement Study (HRS)

◆1998年から2012年における米国在住者からの回答

HRSは
- ミシガン大学が中心となって実施している調査
- 1992年から開始され、高齢者の生活に関わる情報を2年おきに同じ調査対象を追跡している
- サンプル数が2万人ほど
- 米国において全国代表制のある大規模高齢者パネル調査

➢ 方法2－変数－

がん発見のについて
目的変数
・がんを発症した人（イベント発生）
・がんを発症していない人（打ち切り）
の二値

がん死亡について
目的変数
・がん発症し、死亡した人（イベント発生）
・がん発症している人（打ち切り）
の二値

説明変数
・婚姻の有無、・近隣に住む子どもの有無
・近隣に住む親戚の有無、・近隣に住む親友の有無

➢ 方法3－ 分析方法－

・各変数⇒単変量解析、二変量解析

・カプランマイヤー法、ログランク検定

・コックス比例ハザードモデル

統計ソフトJMP Pro11.2

➢ 結果1－研究対象者の概要 n=30312－

性別 n=30312

	総数	男	女
総数（人）	30,312	17154	13,158
構成比（%）	100	43	57

人種 n=30242（欠損70）

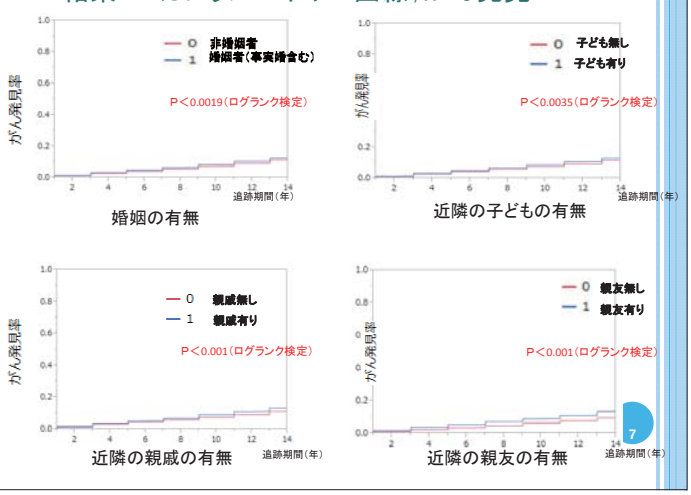
	白人系	黒人系	その他
総数（人）	22,431	5597	2,214
構成比（%）	74	19	7

年齢別 n=30312

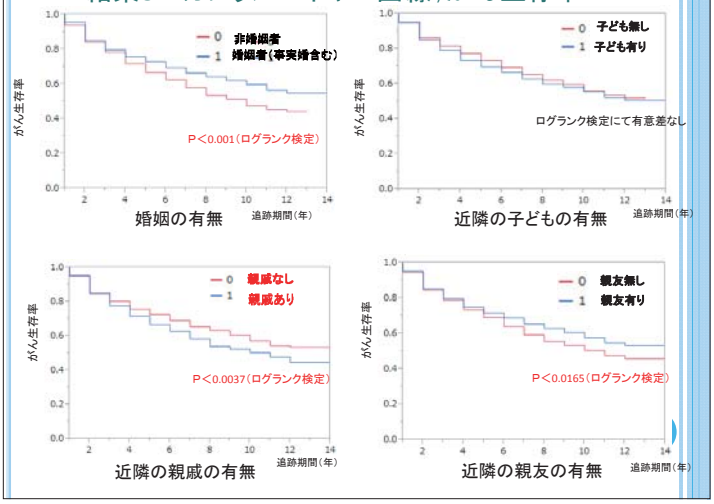
	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～89歳	90～99歳	100～109歳
総数（人）	14	102	798	7565	7531	7624	5029	1585	64
構成比（%）	0	0	3	25	25	25	17	5	0

＊結果以下のデータですが、現在、データのクリーニング及び作業工程の見直し等の関係で、仮の結果となります

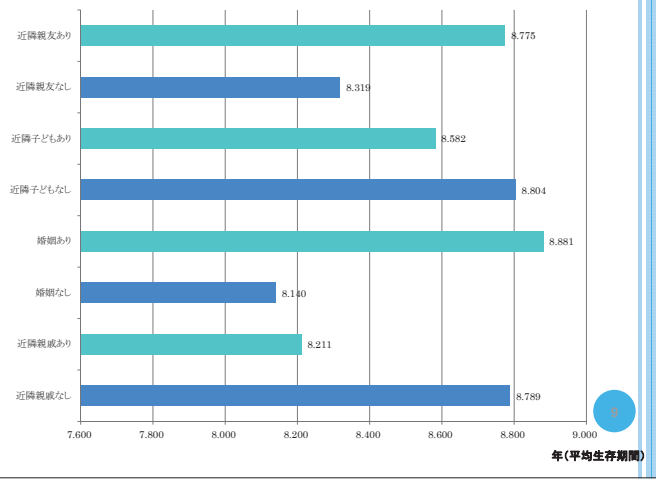
➢ 結果2－カプランマイヤー曲線；がん発見－



➢ 結果3－カプランマイヤー曲線；がん生存率－



➢ 結果4－生存時間の比較－



➢ 結果5－COX比例ハザードモデル－

重要他者の存在とがん発見のハザード比

	婚姻有	近隣の子ども有	近隣の親戚有	近隣の親友有
イベント数/対象者数	2903/30305	2539/25491	2844/29996	2843/27133
HR	1.127（1.045–1.217）	1.123(1.038–1.216)	1.202(1.109–1.301)	1.422(1.316–1.539)
性・年齢補正HR	1.240(1.142–1.347)	1.091(1.008–1.181)	1.132(1.044–1.227)	1.331(1.231–1.440)

＊重要他者の変数「無し」をreferenceとした

重要他者の存在とがん死亡のハザード比

	婚姻有	近隣の子ども有	近隣の親戚有	近隣の親友有
イベント数/対象者数	905/2895	789/2586	882/2863	881/2861
HR	0.774（0.679–0.882）	1.081(0.937–1.248)	1.220(1.060–1.400)	0.852(0.745–0.977)
性・年齢補正HR	0.722(0.625–0.833)	1.083(0.940–1.251)	1.206（1.047–1.386）	0.847(0.740–0.970)

＊重要他者の変数「無し」をreferenceとした

➢ 考察1

・配偶者、近隣の子ども、近隣の親戚、近隣の親友の存在は、自分の健康状態を相談しやすく、がん検診や病院受診のきっかけになることが考えられる

・がんに罹患後、近隣に配偶者がいる人や親友がいる人は、いない人よりも生存時間の延長に関連するがんの治療法を選択しやすい環境にある可能性がある

➢ 考察2

・近隣に親戚がいる人はいない人よりも、がん罹患後、がん死亡のハザード比が高くなっているのだが、現実的には親戚がいることで死亡率が高くなることは考えにくい

⬇

・近隣の親戚について、がん罹患前後の状況など、さらなる分析が必要である

➢ 考察3

結果4では「婚姻ありの人」と「近隣親友ありの人」の生存時間が極めて長くなっている

⬇

先行研究では非婚姻者と比較して婚姻者の死亡率が低いこととの関連が明らかにされていたが、本研究により近隣の親友の存在もがん罹患後の死亡率低下との関連が強いことが考えられる

➢ 結論

- 重要他者が身近にいる人はいない人に比べて、がんが早く発見される傾向がある
- 婚姻者は非婚姻者よりも死亡率が低いという先行研究と同様の結果が得られた
- 近隣に住む親友の存在が、早期にがんを発見できることと、がん罹患後に生存時間延長につながる治療法を選択することとの関連が強いことが示唆された

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません

ご清聴ありがとうございました